

「カウボーイ」は死んだのか？

—アメリカ社会の中でのカウボーイ像の変容—

中 橋 友 子

Is the cowboy extinct?

The changes of the heroes with the changes of American societ

NAKHASHI Tomoko

キーワード：カウボーイ、神話、象徴

I 問題の所在と研究目的

「自由に西部の原野を駆け回り、多くの困難や危険を克服したカウボーイはアメリカ人の理想の男性である」と英文学者の鶴谷は論じる（鶴谷、1989, p.264）（引用 24）。

カウボーイがアメリカの理想像だということは、9.11 直後に、当時のブッシュ大統領による、テロリストたちへの、「rogue（ならず者）」「dead or alive（死んでようが生きてようが捕まえる）」という言葉に端的に表されていると考えられる。それはこの発言に対する賛同の拍手や歓声、そしてその後の、アメリカ世論調査におけるブッシュの驚異的な支持率から裏付けられよう。この発言はアメリカ社会においてはカウボーイが発すると見なされているものである。ここからアメリカの理想像の一つとして、カウボーイが認められると判断される。

しかし、以上にも関わらず、2008 年の映画「グラントリノ」（引用 32）において、大事件が起きる。カウボーイの代名詞クリント・イーストウッド¹⁾が、製作・監督・主演するその映画で、無抵抗のまま丸腰で撃たれて死ぬという、カウボーイらしからぬ死を遂げているのだ。これはカウボーイが理想像として失墜してしまったことを意味しているのか。アメリカ社会は変容したのか。

この論文において、アメリカ社会が何を理想とし追い求めてきたのかを、大衆文化である映画の中でのカウボーイ像の変遷を通じ論じてみたい。その際比較されるのは、最も西部劇映画が製作され、典型的なカウボーイが活躍した 50 年代と、冷戦後文化が多様化し、典型的なカウボーイ映画が製作されなくなった 00 年代である。その二つの時代を中心として比較分析する。大衆文化は社会を反映しており、映画という大衆文化により、我々はアメリカの精神性を読み解くことが可能になるであろう²⁾。娯楽作品を研究することが、一見不可解なアメリカ人の行動原理を読み解く一助となることを期待する。

II 研究方法

本研究では過去と現代、主に 50 年代と 00 年代の西部劇およびそれに類したジャンル映画におけるカウボーイ的なヒーロー像の比較を試みる。そしてその時代のアメリカ社会の変容に焦点を当て論じる。

III アメリカ人と西部のイメージ

アメリカのリーダー達は、様々な場面で西部劇のイメージを多用してきた。例えば、ケネデイは、彼の時代のアメリカ人たちが立ち向かう困難について、「ニューフロンティア」という言葉を

用いた。Hofstadter は、「アイゼンハワーは、西部劇の愛読者であった」(Hofstadter, 2003, p.4) (引用 11) と報じた。ニクソン時代の補佐官・国務長官を務めたキッシンジャーの態度は、一見するとハト派のような力の均衡を考えた外交でありながら、「その対決姿勢は西部劇のそれであった」(大嶽, 2013, p.30) (引用 18) とジャーナリストの大嶽は報じる。また英文学者の鶴谷は、大統領選挙戦中に候補者が、あるいは当選後の大統領が、カウボーイハットをかぶることも多く目撃されると述べる(鶴谷, 1989, p.265) (引用 24)。リーダー達がそのように繰り返しカウボーイ的な振る舞いをしてきたのは、カウボーイという象徴が、送り手のアメリカの指導者達にとっても、また受け手の国民にとって重要なものだからであろうと想像できる。

ではアメリカ人にとって西部とは何か。これについて考察するため、森岡のこの発言、「アメリカ人の国民性を作った二大要因はピューリタンとフロンティア体験である」(森岡, 2014, p.54) (引用 27) に手がかりを求めてみよう。現在のアメリカ合衆国を作ったのはイギリスから宗教迫害を逃れてきたピューリタンと呼ばれるカルヴァン派の人々であると言われている。彼らは新大陸こそ神が与えた約束の地であると考え、そして聖書の再現のように、そこに住み着いた。宗教社会学者の橋爪によれば、このアメリカへの入植は、神聖な、宗教的行為であり、この国が成功するのは自分たちが救われる証であると、アメリカ人たちは信じているということである(橋爪, 2005, p.47) (引用 25)。この西に向かう領土拡張運動は、1845年、「The Democratic Review」の記者 O'Sullivan によって、「明白な運命 (Manifest Destiny)」と名付けられ大義を得た。これは、アメリカが荒野を開拓していくことは神意であるという言説であり、アメリカの政治的な膨張主義は、これにより宗教的使命ということで正当化されたのである。国民の大きな支持を得たこの言説について、森岡は、「「荒野への使命」こそピューリタンの駆動力」(森岡, p.60) と解釈する。

その西部開拓がアメリカ人の国民性の形成にも関わっていくのである。1890年、アメリカ国勢局はフロンティアの消滅を宣言するが、その後の1893年、アメリカ歴史協会年次大会において Wisconsin 大学歴史学教授 Frederic Jackson Turner はフロンティアに関する論文を発表する。それは多くの賛同を得ることになるのだが、その一部にフロンティアがアメリカ人の国民性形成に影響を及ぼしたことを示す記述がある。以下がその Turner の論文の一部である。

「フロンティアは個人主義を生み出す。複雑な社会は、未開の荒野によって、家族に基礎を置く一種原始的な構造へと急激に移行させられる。その趨勢は反社会的なものである。

それは支配に対する反感、とりわけあらゆる直接的な支配に関する反感を生む。…フロンティアの個人主義は最初から民主主義を促進してきたのである。…フロンティア生活の諸条件から、きわめて重要な知的特性が生じた。…鋭敏さと好奇心の強さに結びついたあのがさつさと力強さ、便法を素早く発見するあの実際的で独創的な気質、芸術的志向には欠けるが偉大な目的を達成する力にあふれた、具体的な物事に対するあの優れた把握力、あの休むことを知らぬたくましいエネルギー、目的の善悪を問わず発揮されるあの強力な個人主義、そして自由に付随したあの快活さと溢れるばかりの気力。

これらがフロンティアの特性であり、さらにフロンティアが存在するためにほかの場所でも生じる諸特性なのである。」(Turner: The significance of the Frontier in American History 「アメリカ史におけるフロンティアの意義」引用 森岡, p.65) (引用 27)

Turner は、広大な自由地が絶えず西にあることが強力な駆動装置となり、その西部開拓こそがアメリカの発展をもたらした。そして、その結果生まれたのがアメリカ人という新しい人間である

という。勿論、アメリカの国民性を形成したものには、他の要素も存在する。しかしこの西部開拓がその一翼を担ってきたことには、この論文が多くの支持を集めてきたことから否定できるものではない。

しかし、Turner が論じていることは現実と乖離して「神話」にすぎないとも考えられる。Giannetti は、「神話は一つの文化の共通する理想や願望を形象化」(Giannetti, p.80) (引用 9) したものと論じ、歴史家、Richard Slotkin は、神話は、現体制を都合良く説明するために利用されると論じる。「神話は、現在の文化のイデオロギーを強化するためにある。すなわち過去の出来事や人物を、その文化にとって理想化・英雄化し、それが現在や未来の出来事や人と結びつけられる為に存在する」(Slotkin, 1994, p.19) (引用 14) ³⁾。だとすれば、神話とは、支配層にとって都合のいい考えの集積と結論づけることが出来る。

以上のことから西部開拓の神話の作用は、アメリカの当時の支配体制（キリスト教信奉者の白人男性社会）の規範のイメージ形成に働いてるのではないかという考えが導き出される。そうして、西部神話で活躍する人物が神話ヒーローとなっていく。その代表格がカウボーイである ⁴⁾。社会学者 Robert Bellah は、「アメリカは、最も神話的な個人主義ヒーローを生み出した。カウボーイである」(Bellah, 1996, p.145) (引用 16) と定義づける。アメリカ文化を象徴する神話的ヒーローとしてのカウボーイが具体的にどのように生まれたかについては後述する。

そうしたカウボーイ像の典型は、ジョン・ウエインなどによって演じられる、以下のような性質を持ったものである。「美德を携え、善良で正しく、男らしく、誇り高く、独立心があり、強く、頑固で、銃や暴力の扱いに長けた、白人男性」(Slotkin, 1998, p.243,250,251) (引用 15)。Slotkin の描写するカウボーイの象徴的イメージは、まさに Turner の論じる、荒野を切り開いていく人々の像と重なる。

しかし、これらの像はあくまで神話の象徴であ

る。そして、この神話および神話的なカウボーイ像は、西部のみならず、それ以外にも領土を広げてきたアメリカの大義の強化に手を貸し、冷戦時代のアメリカのイデオロギーの浸透にも、利用されることとなる。これについても後述する。

IV 実際のカウボーイの歴史

一方、アメリカの現実はどのようなものだったのか。まずアメリカを建国したとされるピューリタンについて見てみよう。歴史研究者の川北は、ピューリタンが信仰を求めアメリカに渡り、合衆国を建国したということは支配体制である WASP の建国神話であるとし、実際は植民地時代にアメリカに渡ったイギリス（ヨーロッパ）人の少なくとも3分の2は、白人債務奴隷ともいえる「年季奉公人」だったと当時の資料を用いて論じる。また、恩赦になった犯罪者の流刑地でもあったのがアメリカ植民地であり、当地ではそういった犯罪者は、自由移民と等しく「労働力」として扱われたということである（川北, 1999, p.87-94) (引用 20)。川北によれば、ピューリタンがアメリカを作ったということは WASP がでっちあげた神話にすぎないというのである。

以上のことは、カウボーイにもあてはまる。英文学者の鶴谷は Kansas 大の David Dary 教授の「Cowboy Culture」(引用 2) に、コロンブスの二回目の航海の時に牛のような家畜動物が持ち込まれたとの記述を紹介する。牛馬はまず西インド諸島にもたらされ、その後、プエルトリコ、ジャマイカ、キューバを経て、メキシコで多く繁殖した。そこで修道士達がインディオ達に乗馬や牛の世話を教えた。それがカウボーイの始まりである。当初のカウボーイは、スペイン人はおろか、メキシコ人達からも、馬に乗って仕事をする賤しい労働者と見なされていた（鶴谷, 1989, p.14-18) (引用 24)。

アメリカでのカウボーイの印象も良いものではなかった。1819年に恐慌が始まり、多くの銀行が破産し、土地が抵当で流れた後、政府は西部の

土地を安価で売却する方策を出す。その土地すら手に入れられない多くの人々は、ただ同然であったテキサス（当時はメキシコ領）へ移住し、農業や牧畜に従事することになる。彼らの多くは、南部で馬に乗って牛を飼育していた、奴隷を擁する農園主達であり、この奴隷達が1820年代からテキサスに移動させられカウボーイとなった。それ故、当初黒人カウボーイが多かったし、奴隷労働者の仕事であったカウボーイ業は夢の職業とはほど遠かったのである。またアメリカ独立戦争の折に、農夫から牛を盗んでイギリスに売り、独立派の開拓者達を森におびき寄せ殺傷した親英派のゲリラも「カウボーイ」と呼ばれていたりもした。以上のことから、実際のカウボーイの評判は良いものではなかったと鶴谷は報じる（鶴谷, p.52）（引用 24）。

V カウボーイのイメージ化

その後鉄道が普及し、鉄道による牛の移動が可能となり、また移送地である北部においても放牧が可能になったことから、現実のカウボーイの数は著しく減少していく（鶴谷, p.57, 175, 176）（引用 24）。

しかし、小説や演劇によるイメージとしてのカウボーイは、そうした現実のカウボーイが減少し、フロンティアが消滅する少し前から、人気を博していく。作家の小鷹は、カウボーイが、物語のヒーローとなったのは南北戦争後、主に東部出身の作家達によってである事を報じる。彼らの手による、19世紀アメリカの大衆に人気を博した「ダイムノヴェルズ（三文小説）」においてヒーローの多くは、「冒険とロマンスの新天地＜西部＞で野牛を追い、インディアンを倒し、颯爽と単身、荒野を駆ける西部の正義の騎士だった」（小鷹, 2000, p.46）（引用 23）。それは南北戦争で心身ともに疲弊し、かつ東部の都会で退屈な生活を送る人々にとっては、好奇心をそそられる夢物語のヒーローだったのだ。

虚構化されたこれらのヒーロー達は、大抵ほら

話から生まれている。小鷹は、ダイムノヴェルズやその他の週刊誌に掲載された人気小説の多くは、素性の怪しい作家たちの放浪中の聞き書きによる、語り手自身をヒーローに据えた、自慢話の類いであった事を報じる。有名なバッファロー・ビルやデイビー・クロケットもこの類いである。彼らは、自然の中での自由な生活や放浪の旅、すなわち、自分たちの生き方を美化し誇張して、保守的な生活をする人々に吹聴したのである。つまり、ドロップアウトが、自らの個人主義の優越性を、定住者への侮蔑を込めながら語ったものが、ドラマチックな夢物語として世に送り出されたのだ。それがカウボーイがヒーロー化した発端である。しかし、後のフロンティアの消滅とともに人気は下火になっていく。（小鷹, p.58, 59）（引用 23）。

VI ハリウッドとカウボーイ

ハリウッドは最初期から西部劇を製作した。短編の西部劇映画「大列車強盗」は1903年に製作されており、西部劇は興行的にも成功を納め、ジャンルとして定着し、徐々に西部劇そのものがアメリカ人にとって重要な位置を占めるようになる。

1950年代はハリウッドにおいて、最も数多く西部劇が作られた時代だった。「西部劇の黄金時代」（Slotkin, 1998, p.347）（引用 15）とよばれるこの時代は、朝鮮戦争や、冷戦のはじまりの時代である。

この時期、アメリカ国民の間には共産主義への敵対心が高まりつつあった。アメリカ文化研究者のMaidmentとMitchellは、アメリカ国民のこの共産主義への脅威は、ハリウッドの宣伝活動によってもたらされたことを指摘する（Maidment & Mitchell, 2000, p.118, 119）（引用 12）。すなわち映画はイデオロギーのツールであったのである。Slotkinも同様のことを指摘する。「冷戦時の、政治的・イデオロギー的な問題の解決のため、映画が利用された」（Slotkin, 1998, p.347, 356）（引用 15）。資本主義国であるアメリカは、西部劇映画を、対共産主義との戦争において勝利する為の、

国内外の宣伝に利用したのである。

国内においては、愛国心を高める、いわゆる国威発揚が目標とされた。1930年代から「駅馬車」などの作品でスターとなっていた熱烈な愛国者ジョン・ウエインがこの時期ヒーローとして多用される。熱烈な愛国者として知られた彼はあるインタビューに以下のように答えている。彼は、実際の戦争に臨むことを当初希望していた。しかし、戦争に行くより映画出演の方が国民の士気が上がると説得された。それ故、「俺がアメリカなんだ」(MOVIE, 2007, p.31) (引用 35) という強い愛国心を持ち、映画製作に臨んだということである。

国外においては、アメリカ文化の優位性を広く世界に知らしめるための「文化戦略」として映画が利用された。映画史研究者の北村は、これらの宣伝は「白人の「開拓精神」を崇め、この優越感に満ちたアメリカ史の解釈を「真実」として」(北村, 2014, p. 186) (引用 22) 広報するためであったと論じる。

50年代の西部劇映画は、対共産主義と戦いにおいて自陣営を広げるため、すなわちアメリカ資本主義の正当性を訴えかける道具として、一定の効果を上げた。それは西部劇以外のジャンルの映画においても同様であった。MaidmentとMitchellは「西部劇以外のジャンルの作品においても、例えばSFや犯罪ものでも、そこで例えられている敵は共産主義か非アメリカ的なものだった」と論じる(Maidment & Mitchell, 2000, p.120) (引用 12)。国民感情もそれにつれて、共産主義や非アメリカ的なものを悪とする方向へと舵を切っていく。そしてそれを反映し、映画もそういったものが主流となっていく。映画と民衆感情は影響し合い、この時期、このアメリカの国策に反すると指名された映画製作者達は、映画界を追放されることとなる。こうして「冷戦時に映画で強化されたイデオロギーは現実社会に影響を与えた」(Slotkin, 1998, p.365) (引用 15) ののである。

Slotkinは、アメリカ文化の神話やイデオロギーを体現する西部劇映画は、それ自体が「神話の場所」となり、「偽の歴史」となっていったと

論じる。「西部劇映画は、アメリカ国民の神話・イデオロギーを伝える道具となった」(Slotkin, 1998, p.232, 234, 254) (引用 15)。こうしてハリウッドという装置を使い、国民の支持を得て、カウボーイは神話となっていったのである。

この50年代を代表する作品として「シェーン」(引用 30) があげられる。1949年に小説が発表され、1953年に映画化されたこの作品は、古典的西部劇の代表作で、そのスタイルや精神の多くが、繰り返し模倣され、映画化されている。

シェーンの物語は以下のようなものである。流れ者であるシェーンが、西部のある開拓地にたどり着く。素性はよくわからない。カウボーイの格好をしているが、実際に牛追いをしていたかどうかは定かでは無い。一匹狼(loner)である。けんかも強く、銃の腕もたつ彼は、定住しているスターレット一家に世話になり、一時はその場所への定住も考えるのだが、受けた恩を返すため、スターレット一家の敵であるライカー一味のもとに乗り込み、敵を殺して、その町を去って行く。

このシェーンと、ここで善玉とされている開拓農民スターレットの行動や言動に、前述のSlotkinによって論じられた古典的カウボーイ像、「美德を携え、善良で正しく、男らしく、誇り高く、独立心があり、強く、頑固で、銃や暴力の扱いに長けた、白人男性」という特徴が見られる。この像に従って分析を試みる。

まずは男らしさ、強さ、誇り高さについてであるが、以下のような場面がある。最初にシェーンがスターレットに呼び止められ、その土地を出て行くように指示された際、「命令されるのはいやだ」という誇り高さを示す。また、シェーンは、敵を大勢相手にした時も、「逃げれば臆病者だ」と立ち向かっていく。またライカー一味と一戦交えに行こうとするスターレットは、妻と子に向かって言う。「お前達のために俺は行くんだ。臆病者の汚名を着て、君と暮らせない。」また彼はこうも言う。「ヤワな男なら、この年まで生きてたかどうか！」西部の荒地を開拓してきた男の言説は、強さ、男らしさと暴力性に満ちている⁵⁾。

スターレットの妻が再三言う。「銃なんか必要ないわ。」「暴力でしか解決しないの?」「他の方法があるはず。」絶対的平和主義者の発言と考えられうるこれらの発言は、現実主義者と見られる、スターレットとシェーンによって無視される。そして男性側の主張が通る。映画の最後にシェーンが息子ジョーイに言う。「お母さんに言ってやってくれ。これで銃は消えたよね。」しかしそれは、現実的に、銃や武器を使用した後の台詞である。好戦的な男性の言説を中心に物語は進められていく。

次の特徴として、その暴力や銃の扱いに長けていることがあげられる。大勢の敵を相手に何度も暴力で戦うシェーンは頻繁に暴力を使用する。スターレットの身を案じて戦いに行くのを阻止する際にも、シェーンはスターレットを殴り気絶させる。彼は暴力の扱いに長けている。また暴力を反対する妻に対してスターレットは、相手を「必要なら殺す」とまで言い放す。

銃についても、白人男性達側は、荒れ野を開拓する時に、具体的には、野生動物や先住民との争いやならず者から身を守る為、銃は必要だったと言うであろう。しかし、この舞台は南北戦争後で、すでにフロンティアが終わったとされる時代である。そこでも、シェーン達は銃を手放さない。条件付きでその存在を肯定もする。「銃はただの道具に過ぎない。斧やシャベルと同じだ。使い次第で良くも悪くもなる。」彼のこの言説は現代でも使用されることが多い。大統領選挙の度に銃の所持が選挙の争点となるが、保守派の代表格、NRA（全米ライフル協会）は未だにこの言説を繰り返し、一定数の票を確保している。文明が発達した現在の大都会においても、銃は肯定される事が多い。勿論、心の底から銃を愛し肯定するかと問われれば、否定する者も多いであろう。必要に迫られ、自らや自らの家族を守るためやむにやまれず使用するとする者も少なからずいるはずである。こういった現実主義者達にとっては、銃は今でも不可欠な道具として存在する。いずれにせよこういった思想のもとに、この映画は製作されている。又、銃の所持はアメリカ人達が、自分

たちは民兵としての地位を合衆国憲法により保証されている権利だとする説もある。それは「独立心」の表れ、自衛意識の表れでもある。

この独立心がある、頑固であるという特徴は「個人主義」と言い換えが可能であろう。シェーンも流れ者であり、一旦は開拓者として定住も考えるが、その町には定着せず消えていく。そして、徹底的に個人で考え、戦う。

アメリカ人の個人主義については、Turner が「フロンティアが個人主義を生んだ」と論じたことは前述した（Turner, 引用森岡, p.65）（引用27）。一方、18世紀に建国当初のアメリカ合衆国を訪れた Alexis de Tocqueville は「アメリカのように平等な社会になれば、彼らは自分自身の力で立っていると、全ての運命が彼ら自身の手の中にあると思うのである。」（Tocqueville, 2000, p.622）（引用1）と、それは民主主義の賜であると論じる。

そしてその個人主義の思想的源泉の一つとして、アメリカの思想家、Henry David Thoreau の存在も考えられる。森岡は、マサチューセッツ州の湖畔で二年間独居生活を送り、開拓精神を持って自然と対峙し、その環境に触発され、形而上学的思惟を編んだ Thoreau はアメリカ知識人の代表で、彼の不屈の精神⁶⁾や孤立を恐れない孤高の人格は、アメリカ人に多く影響を与えているという（森岡, 169, p. 170）。個人主義がどこから来たのかについては諸説が考えられるがどの説も妥当性がある。

重要なことは、アメリカの物語においては、正義を追求するためには、カウボーイは個人主義で、タフな一匹狼（loner）でなければならないということである。ヒーローはコミュニティの外にいて、そのコミュニティを守ってくれなければならないのだと Bellah は論じる（Bellah, 1996, p.146）。ヒーローの粗野な行動は文明化された社会にはなじまないが、社会を外から守ってくれることにその存在意義があるのだ。Bellah はしかし、「こうした個人主義は、差別や抑圧につながりかねない」（同, 144）と懸念もする。個人で考

え、行動するという事は、得てして独善的で暴走する危険性をはらんでいるということになる。

ではその個人主義崇拜の基盤となっているものは何か。橋爪は、個人主義であることは個人が神と直接契約をしている、背景のキリスト教思想の影響であると指摘する。ピューリタニズムの個人主義は、隣人愛を実践するにしてもすべて神のため、神に救われるであろう自分のためと考察されうると橋爪は論じる（橋爪, 2005, p.44, 45）。

善良な人格についてであるが、シェーンは好意を寄せるスターレットの妻にも何ら個人的な感情を吐露するでもなく、不正をはたらくでもなく、ピューリタンの勤勉な態度を貫き、隣人に恩を返し去っていった。「善良さ」はヒーローの条件であることを Bellah も指摘する（Bellah, 1996, p.144）（引用 16）。アウトローであってもピューリタンの高潔な人格を持ち合わせていることは、キリスト教精神を基盤とするアメリカ社会の規範には矛盾しない。

またここで展開されるのは、Slotkin の分析のように白人中心主義である。この土地を巡る争いに、所有者としての先住民は最初から含まれていない。先のライカーの言動でも「先住民…を追い払って」と言われ、スターレットの言動でも、最初にこの土地に来たのは、「猟師と先住民相手の商人」とあり、先住民そのものは権利を有する者から予め除外されている。また劇中、冷酷な殺し屋として登場する悪玉は元シャイアン族で、善玉は白人側である。ここまでの特徴は、Slotkin の論じるカウボーイ像の通りである。

これに加え、Turner や Tocqueville、Hofstadter の描写するアメリカ人の国民性がシェーンの持つ特性に合致するところがある。それについて論じる。

彼は実利に即して、素早く考え、行動する。現実的な事態には対処するのであるが、登場するシーンで、じっくり時間をかけて抽象的な思索を行うものは存在しない。実際は行っていた可能性も否定はできないが、それに重きを置かれている語り口の映画とは思えない。これは前述した

Turner の描写する西部の人間像の具現化でもある。「便法を素早く発見するあの実際的で独創的な気質、芸術的志向には欠けるが偉大な目的を達成する力にあふれた、具体的な物事に対するあの優れた把握力」（Turner, 引用 森岡, p.65）（引用 27）と Turner に言わせたこのアメリカ人像、これは Tocqueville によれば、アメリカ人は、学問については「現実すぐに応用できるものだけを取り入れる」（Tocqueville, 2000, p.58）（引用 1）というプラグマティックな知性の持ち主ということになる。

アメリカの歴史家 Hofstadter は、そういったプラグマティックな思想の傾向を「反知性主義」的傾向とする。彼はアメリカ人は「思想は第一義的に実用的であるべき」と考え、「思想を説くことを蔑視」する傾向があると説く。そういった傾向は、アメリカのプロテスタンティズムの遺産であると論じる（Hofstadter, 2006, p.49）（引用 11）。彼はさらに、実学重視の傾向、教養を重視しない傾向は、アメリカンドリームとして存在するたき上げの成功神話「立身出世物語」の根底にある「自助の精神」の影響であると論じる（同, 223）（引用 11）。知性というものが本来、どのようなものかということについては大いに議論の余地があるだろうが、アメリカ人が実学重視で、自助の精神を持ち、考えたらすぐ行動に移す傾向があるという指摘は、Turner と Tocqueville とも共通する。

また西部の神話では、以下のようなヒーローの特徴も見いだされることを Slotkin は論じる。それはヒーローにおいて、正義は法より優先するということである。「保安官を呼ぶのに3日かかる！」そう言って保安官を待たずに飛び出していくスターレット。自ら乗り込んで行って敵を成敗するシェーン。社会の外にいるアウトローにとっては、法を破ることは多々あることだが、それが社会の中に存在する善玉やヒーローにおいて行われるのはどういうことか。Slotkin は、「アメリカの天才は民主主義に反する立場をとる」（Slotkin, 1998, p.175）（引用 15）と論じる。これは古典的

小説「Virginian」の作者、Wister の言葉であり、これを引用して彼は、さらに「生まれながらに資格を有する支配階級の前では、民主主義は価値を成さない」(同, p.178) とある種の選民思想的なイデオロギーの存在について説明する。民主主義が法を作ったのであるが、西部の神話では、立派な人物の行う「正義は、法に優先する」(Slotkin, 1998, p.147) (引用 15) 事態は往々にして生じるのである。

この考えはどこから来るのか。新約聖書のローマ書 13 章 1～4 節のところに「この世の権威はすべて神が作った。正義の為に政治権力はある」という記載がある。法も制度も政治権力である。橋爪は、法や制度よりも正義を重んじる背景にはこのようなキリスト教の思想があると考えられ、例えば法が守れずとも、キリストを信仰すれば救われるという教えを信じる者が多数存在すると指摘する(橋爪, 2005, p.40, 41) (引用 25)。そういった信仰心が、彼らの考える「正義」の心を後押ししているのかもしれない。

また、西部劇において、先住民達との「土地」の争いが、戦争の火種になったことが多いのは周知の事実だが、この映画では、アメリカ資本主義を進める時代を反映し、白人同士であっても「土地」の所有権・財産所有について争いが生じることに、物語の多くの部分がさかれる。

シェーンの恩人であるスターレットは開拓農民であり、その開拓した土地には、もともと牧畜業を営むライカーがいた。ここでは善玉がスターレット、悪玉がライカーとなっている。開拓民は善であり、放牧の時代が終わりを告げるこの時期において、土地を囲っただけの牧場主は悪なのだ。この二人のやりとりの中に、所有権、即ち財産所有の自由に関するアメリカ人の考え方を端的に表している箇所がある。

ライカー「先住民とならず者を追い払って、先にこの土地に来たのは俺だ。お前は俺の土地を囲って奪った！」

スターレット「それは政府の見解と違うよう

だな。牧童以外は土地を持ったらいかんのか？この土地を築いた (find) のは、猟師や先住民相手の商人達、そして開拓民だ。ここは誰もが自由に暮らせる開拓農地なのだ！」

このスターレットの言説に John Locke の精神が見える。アメリカは John Locke の精神の国であると、アメリカの政治思想学者 Louis Hartz は、その著書「アメリカ自由主義の伝統」の中で繰り返し論じた (Hartz, 2001, p.21, 26) (引用 8)。Locke の精神とは、身体による労働が「私有財産」を拡張するための基礎であるとする説である。つまり人間は自分自身の身体に対する固有権 (プロパティ) を持ち、自然が供給したものに、人間が労働を混合し、彼自身のものである何物かを加えたものが彼の所有物になるということだ (Locke, 2010, p.326) (引用 6)。人間は身体による労働によって、共有の自然から何物かを取り出し、共有である自然に労働を加えて、何物かを作り出す。この何物かこそすなわち生産物で、労働する人間の私有財産であるとするものである。Locke は自由主義の元祖であり、「私有財産の擁護をもって国家の第一の任務」(大井・寺沢, 2014, p.342, 343) (引用 19) とした思想家である。アメリカ合衆国はこの考えをもとにモラルや法律を構築している。橋爪の解釈では、アメリカにおいては、ここで述べる「労働」に狩猟採集は含まれておらず、従って狩猟採集を主業とする先住民達に所有権は生まれえないという。所有権がないから、よその土地に移住させることや、居留地に閉じ込めることも可能である。狩猟採集は農業ではなく、自然の成果をただで手にしているだけだからである。しかし、農業をしている場合には土地に対する所有権が生まれ、その成果を排他的に所有することを正当化すると橋爪は論じる (橋爪, 2013, p.118) (引用 26)。これが労働価値説に基づき Locke が主張している言説である。自らの開墾した土地に対するスターレットの主張はまさに Locke の精神の発露であり、勤勉に働いていれば報酬がある、神からの祝福があるとする、

きわめてピューリタンの発想でもある。

実際にアメリカでは、1862年に「自営農地法」が定められている。この法の下では、土地を5年間耕作し、規定された改良を行い、少額の登記料を払えば、160エーカーの公有地がもらえる。その後、1エーカーにつき、1ドル25セント払えば、半年後には所有権が得られるというものである。鶴谷は、「この法律によって農民の西部への移住や開拓が奨励された」（鶴谷、1989, p.189）（引用24）と論じる。Campbell&Keanは、「西部において、所有という資本主義がイデオロギー的に完璧なまでの発露をみいだす」（Campbell & Kean, 2006, p.156）（引用10）と論じるが、その具体例がこの二人のやりとりに表れる。

先に論じたように、これらシェーンの人物像は、この映画の製作された50年代という時代のアメリカの精神性や価値観を示す言動や行動が多く表れる。北村は「この時期に公開されたアメリカ映画は、概して女性よりも男性、有色人種よりも白人、ヨーロッパの民族よりアングロサクソン、また「野蛮」よりも「文明」を「優れた」ものとした。当時のアメリカ社会の支配的価値観を反映・形成していたといえる」（北村、2014, p.108）（引用22）と論じる。牛を追うカウボーイとしては無く、アメリカ人が大事にする「開墾した土地」という「文明」をスターレット一家にプレゼントして去って行くヒーローは、John Lockeを基盤とする、アメリカ型資本主義の守り神でもあった。それこそがこの時期のヒーローの最も重要な使命だったのかもしれない。

VII 1960年代からの社会の変化

ベトナムへの介入も、そういったアメリカのWASP男性を中心とする資本主義社会の世界観の延長と見られる。それを一つの顕著な例から論じる。

この時期に製作されたベトナムと戦う戦争映画において、劇中アメリカ兵は、ベトナム兵を「インディアン」、「恐怖」、「野蛮人」（Slotkin, 1998,

p.493, 522, 527, 531）（引用15）と呼び、ベトナムの地をアメリカ・インディアンの地になぞらえていた。これは実際に戦地ベトナムで行われていた事を反映しているのである。映画と現実は互いに影響し合い、拡張主義は進められていく。

しかし、そういった動きへの異議が、公民権運動によって生まれる。そして、ベトナム反戦運動において活発化していく。具体的には1960年代、ベトナム戦争が泥沼化し、そこで何が起きているかを普及し始めたTVの映像で知ることとなった人々は、主流の価値観が現実にとぐわないうことに気づき出す。すなわち、民主主義の国アメリカを善、共産主義の国ソ連を悪とする考え方である。有賀は、「アメリカ的価値観や生活様式」（有賀, 109, p.85）（引用17）を批判する人々が、反対運動へと進んでいったと論じる。公民権運動の広がりとともに、白人中心に作られたアメリカ文化のあり方に、自らの文化に目覚めた黒人やマイノリティ達が異議を唱え始め、単一の神話も、かつてほどの効力は成さなくなりつつあった。そして拡張主義の背後にあった、それまでの「自民族中心主義」（Campbell & Kean, 2006, p.242）（引用10）、すなわち50年代までの国家のあり方を修正する動きが出てきた。有賀はこの、「異なる人種・民族の独自性を守りながらアメリカ社会を作る文化多元主義の考え」（有賀, 91）（引用17）は徐々にアメリカ社会に取り入れられていったと論じる。

その中で、冷戦のイデオロギーの強化に利用された映画やそれを取り巻く状況も変容を遂げてくる。Slotkinは、冷戦の激化とともに、かつての神話的な映画は、たとえスターを起用しても興行的にも失敗したと報じる（Slotkin, 1998, p.522, 531）（引用15）。

さらにアメリカは戦費の支出や、戦死者の増加により疲弊していく。70年代にはウォーターゲート事件も重なり、大統領や政府への信頼は失墜する。Slotkinは、「冷戦とともに、西部劇はそれを映す鏡ともなっていた」（Slotkin, 1998, p.347）（引用15）と論じる。西部劇も、時代を反

映し、善悪の区別の曖昧な、暴力描写がエスカレートしたものが増え、かつてのような、白人男性が常に正しいヒーローとなる時代は終わりを告げていく。

この時期を代表する作品の一つとしてあげられるのは、女性に人気を得たいが為その扮装だけしている、白人の垢抜けないヒモを主人公とする映画、「真夜中のカウボーイ」(引用 34)である。この作品は1969年、アカデミー作品賞を受賞し興行的にも成功した。明らかにその中ではカウボーイは戯画化され、時代遅れの嘲笑される対象とされた。しかし人々はそれを受け入れた。娯楽作品は、まさに時代の批判精神を映す鏡となり、その時代を反映し映画界はこの時期、「ヒーロー不在の時代」と呼ばれる。

VIII 2000年代のヒーロー

1960年代、急速の変化したアメリカに対して、古き良きアメリカを取り戻したいとする「伝統回帰」(有賀, p.110) (引用 17)の声、70年代に上がる。60年代の反動から、ニクソンが、「白人中産階級の利益を擁護」し、レーガンが「強いアメリカの回帰」を主張し、「政治経済的の保守化が進行」(同, 147) (引用 17)したと有賀は論じる。60年代に民主主義の理念や冷戦のイデオロギーは動揺しても、結局アメリカの政治経済体制は根底から覆ることはなかったのだ。

しかし政治経済における保守派の揺り戻しも、アメリカ社会や文化に起こっていた革新的な流れを止めることは出来なかった。

やがて冷戦が終結し、21世紀となる頃から、新移民が増加し、アメリカ社会が多様化したことを背景に、徐々にアメリカの理想像も変貌していく。かつての、WASP中心の伝統的価値観から、文化多元主義への変化の流れである。しかしそこには、保守派と進歩派の対立する、価値観の違いに根ざした「文化戦争」(同, 148) (引用 17)が生まれていたと有賀は述べる。また進歩派の中にも、かつてのマイノリティの中心だった黒人と、

新移民の間では新たな対立感情が芽生えていた。

そんな中2008年、黒人初の大統領であるオバマが登場する。アフリカ系黒人の父と、アメリカの白人の母を持つオバマは、幼少時代を他民族が共生するハワイやアジアで育ち、シカゴや東部で高等教育を受けた、生まれながらのコスモポリタンである。彼は、新しい価値観である文化多元主義(pluralism)の象徴であった。

映画では、1960年代から、イタリアに飛び、そこで製作された西部劇映画に多く出演していたクリント・イーストウッドが70年代のアメリカで、舞台を都会に変えた、アーバンカウボーイともいえる刑事役を演じるようになる。法の取り決めを守らず独断で突っ走るヒーロー、「ダーテイ・ハリー」(引用 31)はこの時期、国家権力による暴力に対し、民衆の不信と反発が高まっている中で、「社会に対する反権力・反権威的な主張」(渡部, 2013, p.80, 81) (引用 28)をする英雄として物議を醸しながらも、人気を得た。50年代の精神が批判の対象となり、西部劇も製作されず、かつてのヒーロー、カウボーイも戯画化されて現代劇に登場していた70年代では、むしろ、孤独な都会の刑事の方が、「法より正義を優先させる」カウボーイだったのである。

その孤独なアーバンカウボーイの代表、クリント・イーストウッドが、2008年に製作・監督・主演したのが「グラントリノ」である。

ストーリーは、以下のようなものである。朝鮮戦争へ出征経験のある頑固なアメリカの老人が、隣家に越してきたアジアの少数民族の少年の家族と交流するようになる。そして、彼らと友情を深めていく。老人とトラブルのあったチンピラが、その隣家の少女に、彼の身代わりに復讐する事件が発生する。暴力の連鎖を止め、かつ相手の息の根を止めるために考案した戦い方は、老人が自らの体を的にさせ、チンピラ達に蜂の巣にさせるという方法であった。そして最後に少年には、宝物である愛車、グラントリノが残される。

本論文の主旨であるヒーロー像の変化を、50年代カウボーイ的ヒーローであるシェーンと、こ

の「グラントリノ」の主人公コワルスキーの比較で試みる。

まず男らしさや強さ、誇り高さであるが、主人公コワルスキーは、「腰抜け」や「男が庭いじりか！」や「意気地なし！」などの暴言を始終吐き、自らも男らしく振る舞うとともに、友人となったアジアの少数民族の少年、タオにもそれを強制する。その姿は実の息子達から、「親父は、今も50年代だと思ってる」、「親父が怒り出すと台無しになる」と揶揄され、その男らしさや誇り高さ故、周囲と軋轢を生んでいる。50年代と変わらない男らしさが、現代ではでは否定的な評価をされている。

暴力や銃の扱いにも長けている。従軍経験のある彼は銃の扱いにも精通し、当初、強盗に対し銃で脅しもする。暴力も振るう。しかし、その報復のため、隣家の少女スーが乱暴されたことから、暴力と銃の放棄を考える。ここは、シェーンと大きく違う点である。彼は最後に言う。「人を殺すのはどんな気分かって？最悪だ、今でも毎日思い出す」と1952年、朝鮮戦争で、「自ら進んで」13人の敵を殺したこと、その中には17歳の少年もいたことを今でも悔いている。ここで彼は暴力と訣別する。50年代ヒーローと大きく違うところである。

独立心があり、頑固であること、すなわち「個人主義」は健在である。いつも一人であることを、死んだ妻や、牧師にまで心配されてしまうように、個人主義に対する周囲の評価は現代では必ずしも肯定的とは言えない。しかし、徹頭徹尾、自分で考え行動し他人に嫌がられても自分のやり方を貫き通すところは西部の男と変化はない。

善良な人格も基本的には変わらない。始終誰に対しても悪態をつくが、平等であり親切である。最後に自分を犠牲にして隣人に尽くす。そして死後少年に、アメリカ人のあこがれる愛車「グラントリノ」を残していく。

白人中心主義については大きな変化があった。当初、人種差別的発言を多く吐くが、イタリア系に対してもユダヤ系に対しても暴言を吐く。自ら

も WASP ではなく、ポーランド系のカソリックである。悪玉は、アジアの少数民族であるが、同時に彼が友情をはぐくむ相手の少年も同じアジア系で、彼らの文化も徐々に受け入れていく。「アジア人は頭がいいんだろ」と彼らを尊敬する言葉も何度か使用する。白人優位とはいえない。ここは民族や人種で敵味方を分ける考えとは一線を画す。

また旧来のヒーローと変わらぬ点では、所有権・財産所有の自由を確保することである。アメリカを愛し、アメリカ車を愛す主人公には、グラントリノが宝物であるが、それを友人に残す。友人タオにアメリカの財産を残して死ぬのである。アメリカを愛す彼は日本車を最後まで評価しない上、日本車のディーラーである息子のことも最後まで理解できない。

グラントリノを少年に残すことの意味は、移動手段、宝物、そして女性とのデートの小道具を同時に付与しようとする配慮である。しかし、それは同時に、「アメリカはいいだろう」「アメリカ車はいいだろう」というアメリカの優越性の誇示にも映る。

現実的で実際的な知性についても変化はない。当初カウボーイ的に、多くの場面で暴力や銃を振り回す。しかし、少女が暴行されて以降は、暴力の使用は、その連鎖につながる事に気づき、「考える」、「慎重に計画する」という言葉を多く使用する。そして永遠の平和のために、自らの体を犠牲にし、公権力に敵を裁かせる事を考案する。その実際的な知恵の使い方は前述の Turner の西部の人間像「便法を素早く発見するあの実際的で独創的な気質」(Turner, 引用 森岡 p.65) (引用 27) につながる。

しかし彼が50年代ヒーローと大きく違う点は、ここで法を優先させたことである。彼は独善的な正義感のせいで少女に辛い目を合わせたこと、そしてさかのぼって1952年に、自ら進んで17歳の少年も手にかけていたことを吐露し懺悔する。最後は法に身を委ね、身勝手な正義をふりかざすことを放棄する。暴力を肯定する生き方はここで否

定される。

およそ50年にわたってカウボーイを演じてイーストウッド製作・監督・主演の、50年代ヒーローを彷彿とさせる主人公だが、何より大きな違いは、主人公の彼は、最後に、丸腰で、蜂の巣状態で敵に撃たれて亡くなること、そして、撃った相手達を、前述のように公権力によって裁くよう準備したことである。暴力を封じ、公権力に身を任せるヒーローは、きわめて斬新である。この行動は自己犠牲の発露とも言えるし、別の意味においては、自らの体を、相手と戦う「最終兵器」として差し出した、究極の戦い方とも言える。自らの銃で相手を殺しまくった、50年代型ヒーローにはあり得ない戦術である。

そして、家族の価値を大きく宣伝していた50年代のアメリカ映画やドラマと違い、ここでは、異民族の少年に、自らの宝物グラントリノを譲り渡すと遺言に残す。異文化交流であり、文化多元主義の実現である。家族より大事な友情が、かつて自分が殺したアジア人の中に芽生えた事も特筆すべきだが、それは死ぬ間に行いたかった、過去の罪への償いの行為とも言えるかもしれない。アメリカ中心主義からの転換である。

勿論、従来のヒーローと変わらない点は多くある。主人公は、男らしさを強調し、孤独ではあるが自由を謳歌し、平等に皆に暴言を吐き、実用的なことに長け、人格は高潔である。しかもアメリカという国をこよなく愛し、アメリカ資本主義の象徴である大きな車「グラントリノ」を所持していることが最上の幸福であること、すなわちアメリカンドリームであることを少年にほのめかす。最終的に、死後、その車を少数民族の少年に譲ることになるが、それすら、ピューリタンの隣人愛の賜であると解釈することが可能である。また、全身を蜂の巣状になるまで撃たれるという戦い方は、所謂ヤワな男であればむしろ選べないやり方である。加えて、暴力が当たり前となっている西部劇やそれに類似するアクション物と比べると、この暴力を使わないことがむしろ少数派ともいえる。すなわち暴力を使わないことがある種の

「モラルに従わない」こととも言えないこともない。言い換えれば、個人主義的な伝統的アウトローのやり方ともいえる。

多くのヒーローにとって最も重要なことは、「勝つこと」である。このヒーローも例外ではない。暴力の行使はあくまで手段の一つである。また、グラントリノを「所有する」こと自体も人生の目的ではなく、ここでヒーロー的態度として最も重要なのは、アメリカ人の移動の手段であるとともに、アメリカンドリームの象徴、アメリカの財産であるグラントリノの所有権を、少数民族の若者に譲ることである。シェーンが「土地」をスターレット一家にプレゼントしたように、ここでは旧移民が新移民に、グラントリノをプレゼントしたのだ。それは旧来からのキリスト教的隣人愛でもあり、新しい考えである文化融合の象徴でもある。高潔な人格の証明にもなる。現代のアメリカの、英雄的行為の一つの形であるといえよう。

しかし見方を変えれば、この「古いアメリカ車をプレゼントする」という行為と、かつてのアメリカの拡張主義的行為とは、背景にある理念は変わらないと言えるのではないか。いずれも、「キリスト教はいいだろう？アメリカの資本主義はいいだろう？」という、いわばお節介な理念から生じたものであり、車を譲る行為はその理念の象徴的行為である。しかしながら、お節介には、それを欲しない人間も存在する。

クリント・イーストウッドのようなカウボーイ的ヒーローは果たして永久に死んだのか、という問いに対して以下のように答えることが可能であると思われる。老カウボーイの体は死んだ。また社会の変化とともに、文化や正義、暴力に対する考え方に変化はあった。しかし、アメリカという国を愛する心と、それが生み出した「もの」への尊敬の念は死んでいない。イーストウッド自身はこの映画を最後に西部劇や暴力を肯定する映画を製作していない。カウボーイであったクリント・イーストウッドは、自らの暴力の歴史に、この映画でとどめを刺したのである。

Ⅸ まとめと今後のアメリカ社会の展望

カウボーイ的ヒーローはいなくなったのか。もう出現しないのか。亀井は「アメリカ人はこれからはますますナショナルヒーローを探求し続けるだろう」（亀井，1989，p.213，221）（引用 20）と論じる。アメリカ人の意識から、アメリカ的生き方の理想へ夢と忠誠心が消え去ったわけではない。しかし、亀井はヒーローはもっと文化的に多元的なものにならなければいけないと釘を刺す。

鶴谷はアメリカで最も永続している大衆的物語は、カウボーイや果たし合いをする保安官やインディアンの戦士に関するものであり、「この夢もまた今も頑固に存続している」（鶴谷，1989，p.268）（引用 24）と述べる。カウボーイの復活は今後もまだあり得るといえよう。

2013 年には、久々に、カウボーイハットをかぶったテキサス男を主人公とする映画が、大きな興行収益を上げ、主演男優はアカデミー賞も受賞した。「ダラス・バイヤーズ・クラブ」（引用 33）というその映画の主人公は実在のエイズ患者がモデルであり、未承認のエイズ製剤の使用を認めさせるべく自由に世界を奔走する現代のカウボーイであった。しかしその敵は、政府や大手製薬会社、いわばアメリカ資本主義社会の牙城であり、今回のヒーローは巨大資本主義の味方ではない。

しかし敵が誰であろうが、「正義は政治権力より優先する」という古典的な一匹狼ヒーローはここに存在していた。生存の自由、すなわち「薬」という国民の生存を長らえてくれる物の「所有の自由」を担保する主人公は、多くのアメリカ人にとって紛れもなくヒーローだ。シェーンが土地をプレゼントし、グラントリノでは車がプレゼントされたように、彼は「薬」という財産を国民にプレゼントして消えていくのだから。

そういった財産の保全、言い換えれば物質的自由、所有の自由はアメリカ国民にとってことのほか重要である。9.11 の時、テロを行ったイスラム過激派が破壊したのは、アメリカ資本主義の

象徴である WTC ビルであるが、ブッシュ大統領は、この直後、国民に向けて、「アメリカの自由が攻撃された」という旨の発言をした。歴史学者、有賀はこの「アメリカの自由」とは、消費文明に具現される「アメリカの文明」と一体である、と Henry Luce の「アメリカの世紀」で論じられた理念を引用し論じる（有賀，2002，p.208）（引用 17）。自由は精神的自由とは限らないのである。むしろ、自由権に関する最も初期の文書、マグナカルタにおいて、財産を所有する自由として主張されたように、精神的政治的自由、人身の自由と並んで、物質的経済的自由は、「自由」の重要な要素であったし、あり続ける。ジェファースンのヴァージニア憲法にも人民に保障されるべき自由として財産の自由が含まれている。有賀はブッシュのこの放送でも、自由の前に「私たちの生活様式」という言葉を彼が挙げていた事を指摘し、このテロ攻撃は、消費文明としてのアメリカの自由を侵すものとブッシュは受け取ったと解釈する（同，209）（引用 17）。

アメリカの生活様式が侵されたことにアメリカは反撃した。しかし、アメリカ国民の自由のみを擁護するような、自国中心的なヒーローがいれば、「敵」からの攻撃はこれからも収まらないことは容易に想像がつく。同時に、アメリカでは「財産の所有の自由」を守るヒーローは、これからも出現する事は想像できうる。なぜなら、これからもアメリカが資本主義の国であり、物心両面での自由を追求する国であることは、変わらないであろうからである。

敵や時代は変われど、戦う強いカウボーイ的ヒーローはアメリカにはこれからも登場してくるに違いない。自由に西部の原野を駆け回るカウボーイはおそらくこれからもアメリカ人のヒーローであり続けるだろう。勿論、そのヒーローが万人向けであることは、今までもこれからもおそらくない。誰かのヒーローは別の誰かにとっては、敵である。しかし、どこか単一の民族や国家を擁護するヒーローが、神話化される時代は、おそらく、もう来ないはずである。

注

- 1) : クリント・イーストウッドは、映画学の研究者 Louis Giannetti に、西部劇ジャンルの代表と名指しされた (Giannetti, 2004, p.56)。
- 2) : Giannetti は、「たとえ軽い娯楽作品でさえ一定の価値観に染められている」 (Giannetti, 2004, p.126) と論じる。
- 3) : 社会学者 John Storey は、イデオロギーについて、「社会の中のある特定のグループの考えを体系化したもの」 (Storey, 2000, p.3) とする。
- 4) : 英文学者、Giles は「それぞれの文化にはそのアイデンティティを支える象徴的な人間像がある」 (Giles & Middleton, 1999, p.36) という。
- 5) : 「もっとも早い時期の西部劇小説から、西部は男らしさを試す場所として表象される」 (Campbell&Kean, 2006, p.158)。
- 6) : Thoreau は、奴隷制度容認に反対し投獄された経歴を持つ (森岡, p.169-170)。
7. Judy Giles, et.al. (1999) Identity and Difference Studying Culture: a practical introduction, Oxford : Blackwell,
8. Louis Hartz (1955) The Liberal Tradition un America: Harcourt Brace & Co., New York 有賀貞訳 (2001) 「アメリカ自由主義の伝統」 講談社学術文庫
9. Louis Giannetti (2002) Understanding Movies, 9th Edition, New Jersey: Pearson Education, Inc., 堤和子・増田珠子・堤龍一郎訳 (2004) 「映画技法のリテラシー [II] 物語とクリテック」 フィルムアート社
10. Neil Campbell & Alasdair Kean (2006) An Introduction to American Culture, 2nd Edition, London: Roulledge, 徳永由紀子・橋本安央・藤本雅樹・松村延昭・田中紀子・大川淳編 訳 (2012) 「アメリカン・カルチュラル・スタディーズ [第二版] - ポスト 9.11 からみるアメリカ文化」 萌書房
11. Richard Hofstadter (1963) ANTI-INTELLECTUALISM IN AMERICAN LIFE, Alfred A. Knopf, Inc., New York 田村哲夫訳 (2006) 「アメリカの反知性主義」 みすず書房

X 引用・参考文献

1. Alexis deTocqueville (2000) Democracy in America. A Bantan Classic Book
2. David Dary (1982) Cowboy Culture, New York: Alfred A.Knopf
3. John Storey (2001) Cultural Theory and Popular Culture: An Introduction, Harlow : Prentice Hall
4. Frederic Jackson Turner (2008) The significance of the Frontier in American History. Penguin 平野孝他訳 (1989) 「資料が語るアメリカ」 有斐閣
5. Henry David Thoreau (1962) Walden and Other Writings (Bantam Books) 佐渡谷重信訳 (1991) 「森の生活」 講談社学術文庫
6. John Locke (1690) TWO TREATISES OF GOVERNMENT 加藤節訳 (2010) 「統治二論」 岩波文庫
7. Richard Maidment with Jeremy Mitchell (2000) The United States in the Twentieth Century Culture, Open University
8. Richard Maltby(1983)Harmless Entertainment : Hollywood and the Ideology of Consensus, London: The Scarecrow Press, Inc.,
9. Richard Slotkin (1994) The Fatal Environment: The Myth of the Frontier in the Age of Industrialization, 1800-1890, Norman: University of Oklahoma Press
10. Richard Slotkin, (1998) Gunfighter Nation, Norman: University of Oklahoma Press
11. Robert N. Bellah, et.al. (1996) Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life, Berkeley: University of California Press

17. 有賀夏紀 (2002) 「アメリカの 20 世紀 (下) 1945 年～2000 年」中公新書
18. 大嶽秀夫 (2013) 「ニクソンとキッシンジャー」中公新書
19. 大井正・寺沢恒信 (2014) 「世界十五大哲学」PHP 文庫
20. 亀井俊介 (1991) 「ハックルベリー・フィン は、いま」講談社学術文庫
21. 川北稔 (1999) 「ヨーロッパと近代世界」財団法人 放送大学教育振興会
22. 北村洋 (2014) 「敗戦とハリウッド—占領下日本の文化再建」名古屋大学出版会
23. 小鷹信光 (2000) 「アメリカンヒーロー伝説」ちくま文庫
24. 鶴谷壽 (1989) 「カウボーイの米国史」朝日選書
25. 橋爪大三郎 (2005) 「アメリカの行動原理」PHP 新書
26. 橋爪大三郎 (2013) 「世界は宗教で動いてる」光文社新書
27. 森岡裕一 (2014) 「アメリカ文化のサプリメント—多面国家のイメージと現実」大阪大学出版会
28. 渡部幻 (主編) (2013) 「70 年代アメリカ映画 100」芸術新聞社
29. 渡部幻・佐野亨 (編) (2010) 「ゼロ年代アメリカ映画 100」芸術新聞社

雑誌

35. 「MOVIE」(2007. No.2) 共同通信社 記事：「伝説のウエスタン・ヒーロー ジョン・ウエイン」writer : Haruo Jin

中橋友子

(埼玉東萌短期大学非常勤講師)

映画

30. Shane (1953) 製作 : Paramount
監督 : George Stevens
31. Dirty Harry (1971) 製作 : Warner Bros. Pictures 監督 : Don Siegel
32. Gran Torino (2008) 製作 : Warner Bros. Pictures 監督 : Clint Eastwood
33. Dallas Buyers Club (2013) 製作 : Truth Entertainment Voltage Pictures 監督 : Jean-Marc Vallee
34. Midnight Cowboy (1969) 製作 : United Artists 監督 : John Schlesinger